

ペルー

移住者の声



花嫁さんの代替

ペルー香川県人会二世会員(現会長) 土居 ネリ

私の父が丸亀の高等小学校卒業後、間もなく18歳の若さで、移民として、1924年(大正13年)9月19日ペルーへ着いた。幼い末っ子でもあった私は、父が語ったと思う入国当時の事は全然覚えていないので、90の坂を越えた母の

語らいをつづりたい。

移民としての苦労は父も例外ではなかったとの事。あれやこれやと職を変えて、やっとリマ市内に小間物屋を営むまでになった。かなりの余裕ができたので、里の家族に嫁の世話を頼んだそうだ。近くの太田家に白羽の矢が立って、一番姉の米子が嫁ぐことになった。写真結婚とか、写真見合いなどなく、全くの見ず知らずの間柄で、父の父母を頼った縁結びであった。

嫁入り支度も整った折も折、米子が病の床に着き、全快までには長引く患いであった。数少ない南米向けの船便に、間に合いそうもなかったであろうか、両家の慌て案じる解決に、妹の喜美子に「お姉さんの代わりに、おまえが行かないか」と尋ねられたのか、親の言うことにしたがったのか分からないが、母が1932年(昭和7年)10月らくよう丸船上の人となったのである。ペルーでは、まれに高貴の親族を除いては、皆恋愛結婚なので、今の私ども二世には、信じがたい事実である。

思わぬ南米への航海中、母の印象に強く残ったことがあった。気晴らしに、甲板へ出た折りのことである。若い同胞の母が2、3歳の男の子を抱いて、欄干にもたれて海を眺めていた。可愛い子だなと見ていたら、「かーちゃんおっこ」と何回か言ったので、幼児の母親が欄干の手すりの上へ子どもを立たせて、海へ向かって小用をさせようとした。その瞬間、突然現れた大波のためであろうか、船体が大ぶれに揺れた。幼児は母の手から奪い取られ、海中に消えた。船客の大声、船員の急迫で船が旋回停止した。早急に潜水衣服をまとった水夫らが、付近を捜査したら、船腹に吸い付いた状態で死体が発見された。あれから70年が過ぎ、この一瞬を語る母は、沈痛な眼差しを、今なお、床に向けるのである。